ペスタロッチー教育賞
受賞者紹介

しいのみ学園園長

舜地三郎氏

舜地三郎氏は，1906（明治39）年北海道釧路に生まれた。日露戦争に従軍した父に倣い，軍人となることを夢見ていた。しかし，受験した広島幼年学校の初日の身体検査において，目が悪いとの理由で不合格となる。夢絶たれた氏に対し，父は「子供と暮らすか。」と言って広島師範学校への入学を勧めてくれた。以来今日まで，氏は85年間の長きにわたり教育に身を投じることになる。

広島師範学校を卒業した氏は，山村の小学校に赴任する。村の貧しい生活のなかでも，子供は純真でたくましく生きていた。子供らに向けられた氏の眼差しは文学作品として，文芸雑誌『潭海』や中国新聞に発表されている。「早引きをせし 教え子は 田にありて 夕陽を浴びて 稲を刈り居り」は，その１つである。

２年間の教員生活の後，広島師範学校専攻科に入学し寄宿生となる。そこで舎監をしていた教育学者，玖村敏雄と出会う。氏は，玖村から人生観が変わるほど多大な影響を受けた。師のようになりたいと，何十倍もの難関であった広島高等師範学校の入学試験に挑戦し合格した。玖村も，同じ４月から高等師範学校教授に就任していた。ペスタロッチーの『シュタンツ便り』をともに読み，吉田松陰研究の指導を受けた。隣家に下宿を借りて住み，家族のように気にかけていただいた。

再度小学校に赴任後，広島文理科大学で勉学を再開したが，長男が高熱に侵されて，脳性小児麻痺となる。「何としても親の愛情によって，この子の病気を治さねばならない」との一念をもって，心理学による治療法を探し求めた。1940（昭和15）年，請われて福岡女子師範学校に赴く。長男に２年遅れでようやく就学許可がおり，同附属小学校に通うことになった。しかし，勤務校の窓から見え聞こえるのは長男のいじめられる姿であり，その泣き叫ぶ声であった。保護者らの無理解も，はなはだしかった。新制中学校に進学しても，２階から突き落とされるほどのいじめに遭い，長男は義務教育でありながら，学校を中途で去らねばならなかった。

次男も長男と同じ小児麻痺となり，家では就学猶予の次男と退学を余儀なくされた長男が，抱き合って泣いていた。1954（昭和29）年，氏は意を決し，先祖伝来の家屋敷を売って「しいのみ学園」を設立した。子供のことを考えた施設が，基準に合わないとの理由から行政による支援は得られなかった。しかし，それまで教育界から無視されてきた子供に居場所をつくり，そうした行き場のなかった子供の親たちに拠り所を与える施設となった。氏の献身的努力は，手記により広く知られるところとなり，映画化されてひとびとに感動を与えた。

その後も氏は，一貫して障害児教育に生涯を捧げてきた。氏の実践は，その強い教育愛と氏が修めた心理学と医学に裏打ちされた理論によって編み出されている。学会で注目される新知見の創発と子供の成長の可能性を引き出す教材や教育法の開発が，不即不離に展開されているのである。新制福岡学芸大学（現 福岡教育大学）においても，障害児教育の制度化を積極的に進め，常に先進的モデルを示してきた。その影響は日本にとどまらず，1982（昭和52）年に韓国の大邱大学に教授兼大学院長として招かれたのをはじめとして，いまなお世界へと広がっている。

舜地氏の人生の師であった玖村は，学生であった氏とともに読んだ『シュタンツ便り』の「はしがき」を，次のことばで始めている。「およそ偉大なる人の生涯は，その何れの部分をとってみても，そこに全体が躍如として生きているのである。隠れて野に耕すときも，顕れて公に働くときも，成敗得失を一貫して常に全人格の風光が悠々として表現せられている。ペスタロッチーの生涯は，歴時的にいっても決して短くはなく，内容的に見ても極めて波瀾が多かった。」このペスタロッチーに捧げられたことばは，そのまま舜地氏の生涯を描いているようにさえ思える。生涯を教育に捧げ，「しいのみ学園」という妥協なき教育施設を，まさにそれを必要とする人たちに私財をなげうって創設し，これを支える教育理論と実践を発展させた。この教育を必要としている人たちには，国の分け隔てなく広めていくことを生涯の課題として，なお現役として取り組んでいる。

舜地三郎氏のこの長年にわたる功績に対し，第16回ペスタロッチー教育賞を贈呈し，高く顕彰したい。